

## 三太郎CMの構造分析

——広告の記号論4——

中 野 弘 美

### 1. はじめに

一般的にテレビCMは、ターゲット（ある属性や気持ちの傾向をもつ人たち）を予め想定して、その人たちに向けてモノやサービスのベネフィットを約束する。だからターゲット以外の顔色を窺う必要は、基本的にはない。ただその姿勢が時に、CMの嫌われる理由にもなる。自分がターゲットでもないCMを観せられる人にしてみれば、頼んだ覚えもないのに勝手に届けられる画像に、貴重な時間と想像力を割く気などは毛頭起きないだろう。しかしながら広告は「ターゲットとだけではなく、ターゲット以外とも、実は何らかの関係性をもっている」と山本高史（コピーライター／関西大学社会学部教授）は語る。そして次のような逸話をあわせて紹介している。

ある日、大学の廊下で、同じ社会学部の教授に話しかけられた。「気になるCMがあるんやけど」。auの、いわゆる「三太郎」だった。「ヤマモトさん、あれの意味わかる?」。「ほくらはあのCMの相手じゃないんですよ」とほくが返すと、「よかったあ。私、意味がわからなくてね。楽しそうなのはわかるんやけど・・・でも何となく好き」だと彼は告白した。  
(『宣伝会議』2016年7月号p.105)

三太郎CMシリーズのクリエイティブ・ディレクター篠原誠によれば、普通に幸せな家族が面白がってくれるものを創りたかったそうである。おとうさんが「これは面白いのか!？」と家族に聞くような「バカカワイイ」もの。若者におもねったわけではないが、若者に向けたものにはなる。彼らにスペックは効かない。彼らの好き／嫌いははっきりしているから。だから「何となく好き」になりたかった。篠原の発言を山本はそう伝えている（『宣伝会議』2016年7月号p.105）。

Webマーケティングの時代に、オールターゲットの説得力は鈍い。ところが三太郎CMには10代から60代まで幅広い年齢層が反応しており<sup>1</sup>、2016年にはTCCグランプリを受賞した。このCMシリーズが幅広い世代に「何となく好き」と好感される所以は何か。本論文では、物語内容の構造分析からその謎にアプローチしてみたい。

<sup>1</sup> KDDI/au三太郎のCM好感度は2015年1月から32ヶ月連続総合第1位（『月刊CM index』（2015年2月号～2017年8月号）に拠る）である。

## 2. 広告と物語

### 2.1 物語広告

同一のテレビCMに繰り返し接触する視聴者 (audiences) は、それに飽きてしまうだけでなく、好感から反発への逆転現象をしばしば経験する。最も極端な事例は東日本大震災 (2011年3月11日14時46分発生) 後に起きた、ACジャパンのCMに対するオーディエンスの反応であろう。2010年度のACのCMは合計23本あったが、震災後さまざまな理由で4本 (『見える気持ちに』『あいさつの魔法』『あなたの手当て』『こだまでしょうか』) に激減した。民放東京キー局5局は3月15日から22日までの1週間、1日3,000回以上もそれら4本のCMを放送した。同じCMを延々と繰り返したため、耳にタコができた人も多かっただろう。ちなみにACジャパンのような啓発CMでは「3回までなら効果が増大するが、5回を超すと効果は低下する」という研究報告もある (『週刊現代』2011年5月7・11日合併号pp. 163-7)。

CMの送り手が、繰り返し接触による受け手の反発を回避するために、CMのシリーズ展開を図るのはむしろ常套手段といってよい。大正製薬「リポビタンD」のCMシリーズ (1963～) などはその最も古い例の一つである。一方で、長期にわたる展開を想定したドラマ型CMが、ブランドに好感をもってもらうフレームワークとして、10年ほど前から増えてきた。妹尾俊之は物語を中核に据えたブランドCMシリーズに、共通する特徴として以下の3点を挙げている：

1. 製品より人間的ドラマにウエイト (虚構性)
  2. 長期にわたるシリーズ展開 (時間的継続性)
  3. OOH/SNSを通じたセールス・プロモーションの仕組みづくり (空間的発展性)
- (妹尾俊之2015 pp. 155-6)

これらの特徴とする広告コミュニケーションのスタイルを、妹尾は「物語広告」と定義する。例えば、中央酪農会議『牛乳に相談だ』シリーズ (2005～2009)、サントリー『宇宙人ジョーンズ』シリーズ (2006～)、ソフトバンク『白戸家』シリーズ (2007～2017) などは、物語広告の特徴を全て兼ね備えていると言える。では妹尾のいう「人間的ドラマ」とは、そもそもどのような形式をもつ言説なのか。

### 2.2 物語内容の構造分析

文学理論では「物語」とふつう呼ばれているものに、3つの相を識別している。まず「物語言説 (レシ)」。これは言語的存在としての物語をさす。次に「物語内容 (イストワール)」。これは語られる話の内容をさす。そして「物語行為 (ナラシオン)」。これは語るという行為をさす (ジュネット1985, 土田他1997 p. 50)。本論文ではこのうち物語内容について議論する。物語内容の構造分析は、語られる内容の骨格に特に注意を向ける。古代ギリシアの哲学者アリストテレスは「登場人物」と「行為」をストーリーにおける最も大切な要素と見做し (『詩学』)、登場人物は行為を通して示されるべきとした (バリー 2014 p. 267, バルト1988 p. 140)。

ロシア・フォルマリズムの批評家ウラジミール・プロップは、ロシアの魔法昔話約350編について共通の構造を抽出しようとした (プロップ1987)。物語の基本構造は「誰かが何かをする」という主部と述部に分かれる。主部にあたるのが登場人物であり、述部が彼らの行為である。

プロップはまず「何かをする」という「行為の連鎖」の領域を分析し、次に「誰かが」という「行為の動作主」の領域を扱う。こうした視点は「表層に現れる多様な要素の背後に、潜在的な一般的枠組みを透視するという点で、構造主義的アプローチを30年も前にすでに実践していた」ことになる(土田他1997 p. 43)。

「行為の動作主」の関係から物語の構造を研究したのが、構造主義の批評家アルジルダス・グレマスである。彼は登場人物たちの性格描写よりも、ストーリーの進行の中で彼ら／彼女らが果たす役割に着目する。グレマスは3組の対をなす6つの「行為項actant」を以下のように定める：1) 主体／客体(願望・探索の主体／対象)、2) 送り手(価値の決定者・審判者)／受け手(受益者)、3) 補助者(主体の願望・探索の援助者)／反対者(敵対者)(グレマス1988 p. 223)。留意すべきはグレマスが(そしてプロップも)価値の決定者(送り手)を設定したことである。「行為項」も「行為の連鎖」も、外側の枠組みを成す超越的な決定者の要請によってはじめて生じる。さらに主体の行為は、一段高次の外部的なレベルに存在する受益者に受け取られることによって、はじめて物語的に終結することになる(土田他1997 pp. 46-7)。

文芸批評家のロラン・バルトは物語の中では全てが意味をもつと論じ、「シークエンス」のより綿密な分析の基準を提示する。バルトによれば、作品の中には筋に関わらない要素(人物の性格を示す徴候や、人間関係を暗示する仕草など)があり、それらの指標こそが物語の内容にとって重要な情報をもたらす(バルト1973, 土田他1997 p. 45)。

このように概観してみると、「人間的ドラマ」の形式は「誰かが何かをする」という主部と述部に分けられる。そして文と同じように、物語の中心は動詞であると考えられることができるだろう。次章では、以上の先行研究のうち、特にグレマスとバルトの手法を援用して、物語内容の構造分析を実践してみたい。

### 3. 三太郎CMテキストの構造分析

#### 3.1 分析の枠組み

ある行為(an action)が特定の状況の中で時間的に展開されると物語となる。その行為に社会的／文化的属性を与えると役割(a role)となる。またその行為に個別化の属性を与えると登場人物(a character)となる。物語とは基本的に、一つの行為から他の行為へ価値が移ること(語りの連鎖)であり、おとぎ話に典型的な連鎖は：

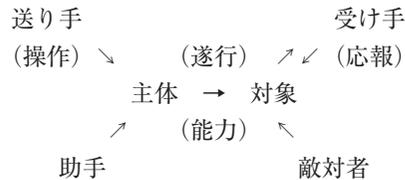
1. 描写的発話(descriptive)：人物とその状況の特徴づける。
2. 叙法的発話(modal: implying action)：話者の心的態度が表明される。
3. 移行的発話(transitive)：何らかの価値の移行、状況の変化がもたらされる。

という3つ組(以下、分析概念A)から構成される(グレマス1988, スコールドズ1992 p. 153)。分析概念Aの各要素は特定の機能を担うが、3つの順番は常に変わらない。一般的に物語は、中心的人物(主体)の希望の実現へと向かって展開する。それは、主体の叙法的発話が移行的発話に転換すること(例：獲得したい→獲得する)を意味する。ただし、その実現化までには[したい]—[能力をもつ]—[実際に可能]—[する]という階層が存在し、それが物語の枠組みをつくる。

この階層的な枠組みについて、現在では[操作]→[能力]→[遂行]→[応報]の4段階(以

下, 分析概念B) に分けることが一般的とされている (スコールズ1992 p. 310). おとぎ話の登場人物の行為をこの構造を使って整理してみると, 送り手 (例: 国王) は「操作」段階に登場し, 主体に対象 (例: 薬) を求めるように仕向け, 契約をむすぶ (このとき主体は対象に関する情報を得, 「したい」という心的態度を示す). 物語はこの契約なしには先に進まない.

「能力」段階では, 助手 (例: 魔法の杖) が主体に「できる」という心的態度を与える. 一方, 敵対者は反対の役割を演じる. 「遂行」段階で, 主体は対象を獲得する. 最後の「応報」段階では, 主体は受け手 (例: 国王) に対象を贈る. その代わりに, 受け手は主体に報酬を与える. スコールズ (1992 p. 310) を基に, 以上を図式化しておく.



### 3.2 テクストの構造分析

本節では三太郎CMの各エピソード (2014年12月31日~2015年12月31日放送分, 全28話 (auのHP「三太郎スペシャルページ」に拠る)) をそれぞれ一つの物語と捉え, 物語内容の基本的構造を上述の分析概念AおよびBを用いて, 時系列に沿って考察する. 文学言語と異なりテレビCMの「コトバ」は, languageだけとは限らない. 画像などのvisualや, 音響効果などのsoundもまた「コトバ」を構成する. ビジュアルやサウンドを広告の「コトバ」として, 言語表現と同じ地平で考察するためには, 記号論 (semiotics) という理論的枠組みが有効である. 記号論はソシュールやヤーコプソンの言語学を研究モデルにしており, 映像や画像, 人間の身振りや仕草もまた, 言葉に類似した働きをもつシステムとして分析する. ここでは三太郎CMを構成する, 言語表現と画像表現を「記号の織物 (texts)」として分析し, テクストの意味作用を明らかにしていく.

注意しなければならないのは「分類ゲーム」に陥らないこと. すなわち生身のテキストを, 分析概念に無理やり押し込めないことである. 図式の安易な応用はつねに危険である. よって2つの分析概念が, 道標として適合するか否か (それらによって合理的に説明できるかどうか) をあわせて検討する. 分析概念Aの3つの発話および分析概念Bの4つの階層が, それぞれ同定できる場合は記号◎を, できないときは▲を記す. またバルトのいう指標について, 注目すべきものに■を付してその内容を記述する.

加えて, 私たちが仮説的に指定しているテキスト分析の枠組み——広告のレトリックの働きを表す5つのparadigmと3つのsyntagmの組み合わせ (15種類のオペレーション (以下, op.)) ——をエピソード毎に同定していく (中野2012, 中野2015, 中野2016)<sup>2</sup>.

<sup>2</sup> パラダイムによって選ばれた要素がシンタグムによって順序づけられると意味作用が起動する.

		Addition足し算	Suppression引き算	Substitution置換
Identity	同一性	A	F	K
Similarity	類似性	B	G	L
Difference	差異性	C	H	M
Opposition	対照性	D	I	N
Ambiguity	両義性	E	J	O

## 第1話 新しい英雄 金太郎篇 (2014/12/31～)

桃太郎の生家で金太郎・桃太郎・浦島太郎が話をしている (◎描写的発話: 桃「なんか金ちゃん、元気くない?」。金「なんか俺って、イケてないなって」。▲[操作] 不明)。金「まあね、お二人ともストーリーがメジャーですよ」(◎叙法的発話: 主体は桃太郎や浦島太郎のような有名な物語の主人公になりたい)。桃「じゃあ創ろう」。浦「そうだ新しい話、創ろうよ!」(▲[能力] 主体は自分ひとりでは新しい話を創ることができない。▲[遂行] 新しい物語は予告されるが、内容は不明。■桃太郎と浦島太郎が主体に協力を申し出る)。ナレーション (以下、N)「新しい英雄 (au) 始めよう」(▲移行的発話: 英雄たちの物語が予告されるが、内容は不明。▲[応報] 主体が何を報酬として得るか、内容は明かされない (op.F: ellipsis 省略))。

## 第2話 三匹セット篇 (2015/1/15～)

桃太郎の「きびだんごの数」について三太郎が話をしている (◎描写的発話: 金「ねえきびだんごって、あの三匹に一個ずつ?」。▲[操作] 不明)。浦「ケチだよねえ」。金「いや逆だよ。3匹セットなわけだから、3匹に一個でいいんだ」。浦「ちょっと、金にうるさいよ」。桃「カネ太郎だな」(◎叙法的発話: 桃太郎は費用対効果を高めたい。◎[能力] ◎[遂行] 主体はお供に報酬を支払う能力がある。◎移行的発話: 主体は支払いを「3匹セット」で実行する。■主体と浦島太郎が目配せして金太郎をからかう)。N「セットといえば、自宅のネットとセットでスマホが割引になるauスマートバリュー」(◎[応報] 主体は経済的に得をする。「セット」という語が3回発話される (op.A: repetition))。

## 第3話 桃太郎の出生篇 (2015/1/18～)

金太郎の家で三太郎が桃太郎の出生について話をしている (◎描写的発話: 浦「桃ちゃんって、本当に桃から生まれたの?」。▲[操作] 不明)。桃「そう、パッカーン、オギャーって。ばあちゃんがゴメンって。俺、いや、いいよって。パッカーン (4回)」(◎叙法的発話: 主体は生まれた経緯を自慢げに語る。▲[能力] ▲[遂行] おばあさんが桃を割った。主体は受け身。▲移行的発話: 主体は発話の時点より前の事柄を述べている (後説法)。■金太郎と浦島太郎は大笑いして同時にのけ反る)。N「パッカーンといえば、思いっきり割ります。auの学割」(▲[応報] 主体が報酬を得たかは不明。「パッカーン」という語が6回発話される (op.A: repetition)。「パッカーン」は硬いものを割ったとき (またはauの割引) の擬音語onomatopoeia (op.M: metonymy))。

## 第4話 玉手箱篇 (2015/1/29～)

浜辺に佇む桃太郎と金太郎のもとへ、浦島太郎が玉手箱を持って駆け寄ってくる (◎描写的発話: 浦「桃ちゃ～ん。金ちゃ～ん」。▲[操作] 不明)。桃「開けちゃってるじゃん、玉手箱」。金「てか、超うれしそうだし」。浦「これ開けたらすごい出てきた!」(◎叙法的発話: 主体が期待に胸躍らせる)。桃「何これ?」。浦「分かんない」金「それ何に使うの?」。桃「分かんない」(◎[能力] ◎[遂行] 主体が玉手箱を開け、何かを発見する。■主体と桃太郎は同じポーズをとる)。浦「てか、これ何だろう?」(◎移行的発話: 主体は「すごい」を左耳に当てる)。N「すごいのが出ました。新auスマホ」(▲[応報] 「すごい」の内容は明かされない (op.F: ellipsis))。

## 第5話 マネ太郎篇 (2015/2/12～)

金太郎・桃太郎・浦島太郎が輪になって原っぱに仰向けに寝そべっている (◎描写的発話: ビジュアルが人物とその状況の特徴づけている. ▲[操作]不明). 金「ああ, 腹へった」. 桃「ああ, 腹へった」. 浦「ああ, 腹へった」 (◎叙法的発話: 主体は自分の発言を2人に真似されて不満だ. ■桃太郎と浦島太郎は模倣するのが愉快そうだ). [模倣がスピードアップするにつれ, とうとう3人の発話は同調する] 桃「シンクロした」 (▲移行発話: 3人は依然として, 輪になって原っぱに仰向けに寝そべっている. ▲[能力] ▲[遂行] 主体は常に受け身である). N「シンクロできます. auスマホ」 (▲[応報] 主体がどんな報酬を得たかは不明. 商品の具体的内容は明かされない (op.F: ellipsis)).

## 第6話 金銀財宝篇 (2015/2/12～)

鬼退治で桃太郎が持って帰ってきた金銀財宝を金太郎と浦島太郎が眺めている (◎描写的発話: 浦「すっげ〜桃ちゃん, これえ」. ▲[操作]不明). 桃「ちなみにこれ, 親に預けてるんだ」 (◎叙法的発話: 獲得品を家族に与えたい. ◎[能力] ◎[遂行] 主体は家族思い). 桃「ばあちゃん, 一旦預かってくねって」. 浦「それ絶対親のもんだよ!」 (◎移行発話: 資産管理を保護者が行なっていることが示唆される). 桃「まあそれで家族がうれしいなら, 俺もうれいしきさ」. 浦「やさしい子」 (■金太郎と浦島太郎が「いい話」に同時に感動する). N「家族もうれいなのはauの学割」 (◎[応報] 主体は家族に感謝される. 「家族もうれい」という句が3回発話される (op.A: repetition)).

## 第7話 桃太郎とかぐや姫篇 (2015/3/4～)

桃太郎とかぐや姫のデート現場を浦島太郎と金太郎が覗き見している (◎描写的発話: 浦「ほんとに逢ってた」. ▲[操作]不明. ◎[能力] ◎[遂行] 主体はモテる. 彼はかつて浦島太郎を「だから浦ちゃん, モテないんだよ」(第1話スピンオフ)と揶揄していた). か「あたしと家族になろう」. 桃「まあいつかはね」 (◎叙法的発話: 主体は対象と家族になりたい). か「今すぐじゃダメなの?」[対象の涙(嘘?)に主体が動揺する] 桃「ダメじゃないけど」. 姫「じゃあ, すぐなろう. ハイ! 家族」. 浦「退治された」. 金「鬼嫁だな, あれは」 (■金太郎と浦島太郎が目配せして論評しあう). 桃「家族になっちゃった」 (◎移行発話: 状況の変化がもたらされる). N「いま家族で買うとお得です. auスマホ」 (◎[応報] 主体に新しい家族ができる. 「家族」という語が4回発話される (op.A: repetition)).

## 第8話 子だくさん雉篇 (2015/3/10～)

桃太郎は金太郎からお供の交替を打診される (◎描写的発話: 金「桃ちゃんさ, うちの熊貸すから雉替えようよ」. 金太郎はかつて桃太郎に「うちの熊貸そうか」(第1話スピンオフ)と提案していた. ▲[操作]不明). 桃「雉, 子だくさんなんだ」. 浦「桃ちゃん本当は家族一人一人にあげてんだよ」 (◎叙法的発話: 主体は助手(雉)の存続を希望する. ◎[能力] 主体は雉一家を養う能力がある. ◎[遂行] 扶養能力を実現する). 金「家族, ひとり, ひとり・・・」. 桃「金ちゃん, なに泣いてんの?」 (◎移行発話: 金太郎は主体の希望に共感し, 価値観を変える. ■金太郎と浦島太郎が主体の行為に同時に感動する). N「家族一人一人が割引. auスマートバリュー」 (◎[応報] 主体は雉一家に感謝される. 「家族一人一人」という句が4回発話さ

れる (op.A: repetition)).

#### 第9話 二人のなれそめ篇 (2015/3/29~)

桃太郎とかぐや姫は新居に浦島太郎と金太郎を招待する。浦島太郎と金太郎は2人の恋のきっかけを尋ねる (◎描写的発話: 浦「で、お二人のなれそめは?」。▲ [操作] 不明)。桃「かぐちゃん竹からパッカーン」。姫「桃ちゃん桃からパッカーン」。浦「パッカーン繋がりだ」。桃「それ繋がりだ、家族」。金「どんななれそめだよ」 (◎叙法的発話: 主体は経緯を自慢げに語る。かぐや姫も自慢げ。▲ [能力] ▲ [遂行] おばあさんが桃を割り、竹取の翁が竹を割った。主体は受け身。▲ 移行的発話: 主体は発話の時点より前の事柄を述べている (後説法))。桃「だから桃と竹からパッカーン」 (■金太郎と浦島太郎が大笑いして同時にのけ反る)。N「家族も割ります。auの学割」 (▲ [応報] 主体が報酬を得たかは不明。「パッカーン」という語が7回発話される (op.A: repetition)。「パッカーン」は硬いものを割ったとき (またはauの割引) の擬音語onomatopoeia (op.M: metonymy))。

#### 第10話 武勇伝篇 (2015/3/29~)

桃太郎が鬼退治の武勇伝を得意げに浦島太郎と金太郎に語る (◎描写的発話: 桃「まず犬がガーンといったよね。猿が鬼にキーンと。俺もシャキンって」。▲ [操作] 不明)。浦「で、止めは?」。桃「鬼の足元にトコトコトコ」 (◎叙法的発話: 主体は鬼退治の武勇伝を自慢する。▲ [能力] ▲ [遂行] 主体は雉一家の予想外の助けをかりて鬼退治を成し遂げた)。桃「鬼が、もうまいった〜って」 (▲ 移行的発話: 主体は発話の時点より前の事柄を述べている (後説法))。桃「だから、雉の家族一人ひとりがさ」。浦「雉、家族連れなの?」 (■金太郎と浦島太郎が同時に驚愕する)。桃「鬼が、鳥はマジかんべんって」。N「家族一人一人のスマホが割引。auスマートバリュー」 (▲ [応報] 主体は報酬を得たはず (第6話) だが言及されない。「家族一人一人」という語が3回発話される (op.A: repetition))。

#### 第11話 龍宮城篇 (2015/5/13~)

浦島太郎・桃太郎・金太郎が浜辺にいる (◎描写的発話: 桃「龍宮城、行ってみたいな」。浦「じゃあ今から行く?」。▲ [操作] 不明)。桃「この亀にどうやって乗るの?」。浦「乗るんじゃないで、乗せていくの」 (◎ [能力] ◎ [遂行] 主体は2人を龍宮城へ導くことができる)。桃「コクればいいじゃん」。浦「無理だよ」。桃「やらないで後悔するより、やって後悔したほうがずっといいよ」 (◎叙法的発話: 主体は乙姫 (対象) に逢いに行きたい)。金「今年の夏は今年しかないんだよ」。桃「それ、当たり前だよ (■桃太郎と金太郎が同時に主体を誘導する)」。浦「夏って、なんか自由」 (◎移行的発話: 龍宮城行きが予告される)。N「Summer auはじまる」 (▲ [応報] 新キャンペーンは告知されるが、内容は明かされない (op.F: ellipsis))。

#### 第12話 かぐや姫の家族篇 (2015/5/28~)

桃太郎とかぐや姫が金太郎と浦島太郎に質問される (◎描写的発話: 金「かぐちゃんの家族って、結婚に反対しなかったの?」。▲ [操作] 不明)。か「家族一人一人がね、大喜び。一番喜んでくれたのはオトちゃんかな」。金「へえおとうちゃんが?」。か「じゃなくて、オトちゃん」。桃「誰だっけそれ?」。か「乙姫」。金「乙姫って?」。か「お姉ちゃん」 (◎叙法的発話: 主体

は妻の姉が乙姫であることに驚く。■金太郎と浦島太郎も同時に驚愕する。▲[能力]▲[遂行]主体は受け身。▲移行的発話:主体は発話の時点より前の事柄を述べている(後説法)。浦「そこも家族なの?」。N「家族一人一人のスマホが割引。auスマートバリュー」(▲[応報]主体が報酬を得たかは不明。「家族」という語が5回発話される(op.A: repetition))。

#### 第13話 乙姫登場篇 (2015/5/28~)

乙姫が龍宮城で三太郎を迎える(◎描写的発話:桃「これが龍宮城か」。乙「あら、いらっしゃ〜い」。▲[操作]不明)。金「おっ玉手箱じゃん」。乙「それ開けちゃだめ!あんた、えらいことになるよ。開けちゃだめつつってんだろうが!」(◎叙法的発話:主体は特定の箱だけを開けてもらいたい。◎[能力]◎[遂行]主体は他者に命令でき、それを実行する)。桃「すごい出てきたね」(◎移行的発話:主体の本性が判明する。■桃太郎と金太郎が同時に主体の凄い性格に戦く)。N「すごい続々。夏の新auスマホ」(▲[応報]「すごい」は告知されるが、内容は明かされない(op.F: ellipsis))。また、先の「すごい」のシニフィエは「乙姫の本性」、後の「すごい」のシニフィエは「スマホの新機種」(op.E: antanaclasis異義反復)。

#### 第14話 龍宮城ポイント篇 (2015/6/5~)

乙姫が龍宮城で金太郎を迎える(◎描写的発話:乙「あら金ちゃん、一人で来てくれたの?」。▲[操作]不明)。[実は浦島太郎も一人で遊びにきていた]浦「わたくし、週三で来ています」。乙「ポイントもいっぱい貯まってるわよ」。金「ポイントも貯まるの?」(◎叙法的発話:主体は客に龍宮城へ来てもらいたい。◎[能力]◎[遂行]主体は他者を誘惑できて、それを実行する。◎移行的発話:龍宮城へ行くのと得をする。浦「おいっ、乙ちゃん狙ってんのか?」(■浦島太郎が金太郎に嫉妬する)。N「いろんなお店でポイント貯まる。au WALLET」(▲[応報]お得な内容は明かされない(op.F: ellipsis))。

#### 第15話 ビーチフラッグ篇 (2015/7/2~)

浦島太郎・桃太郎・金太郎が浜辺でビーチフラッグ競争をする(◎描写的発話:かぐや姫「よいドン!」。▲[操作]不明)。(桃太郎と金太郎は勢いよく飛び出すが、主体は中々走り始めない。)浦「♪もしもし亀よ亀さんよ、世界の内でおまえほど、走りの速いものはない」(◎叙法的発話:主体は亀(助手)の力を借りて競争に勝ちたい。◎[能力]◎[遂行]助手はかなり速く移動できる)。(浦島太郎は2人を追い抜くが、ルールを知らず走り去る。懐から落ちた亀がフラッグに触れる)か「はい、1位〜」(◎移行的発話:主体は3人の中で一番速く走る。■3人は短距離走で遊ぶ)。N「ダブルで速いauスマホ」(▲[応報]主体はルール違反を犯し失格。商品の内容は明かされない(op.F: ellipsis))。

#### 第16話 海の声篇 (2015/7/16~)

浦島太郎が浜辺に佇み海に向かって唄う。桃太郎と金太郎が離れた所から聞いている(◎描写的発話:浦「♪空の音が聞きたくて〜」。▲[操作]不明)。浦「乙ちゃ〜ん!」(◎叙法的発話:主体は乙姫(対象)に想いを届けたい。◎[能力]恋心を唄に託す能力がある。◎[遂行]唄を披露する)。桃「届くといいね」。金「うん」(◎移行的発話:主体の歌う楽曲が披露される。■桃太郎と金太郎が共に主体を応援する)。N「高音質通話。auガラホ」(▲[応報]主体の想

いが報われたかは不明. 商品の内容は明かされない (op.F: ellipsis)).

#### 第17話 かぐや姫の帰省篇 (2015/7/31~)

桃太郎とかぐや姫が帰省について話をしている (◎描写的発話: か「桃ちゃん, 今度月の実家, 帰っていい?」. ▲ [操作] 不明). 桃「全然いいよ. たまには家族でさあ」. か「えっ何か嬉しそう」. 浦「確かに」. か「じゃ, 日帰りにしよっかな」. 桃「せっかく月まで行くんだしさ, ゆっくりしてきなよ」. か「止めよっかなあ」. 桃「いやいや家族一人一人に会ってきなよ」 (◎叙法的発話: 主体はつかの間の自由に驚く). [かぐや姫が主体に疑いの目をむける]か「ジロりんちょ」 (▲ [能力] ▲ [遂行] 浮気予感? ▲ 移行的発話: 夫婦関係が変化したかは不明. ■金太郎と浦島太郎が目配せして面白い). N「家族一人一人のスマホが割引. auスマートバリュー」 (▲ [応報] 浮気をして罰せられたかは不明. 「家族」という語が3回発話される (op.A: repetition)).

#### 第18話 龍宮城ぶるぶる篇 (2015/8/3~)

浦島太郎・桃太郎・金太郎が龍宮城で新作メニューを振舞われる (◎描写的発話: 乙「これ龍宮城の新作メニューなの」. ▲ [操作] 不明). 乙「浦ちゃん, 食べてみて」 (◎叙法的発話: 主体は乙姫の歓心を買いたい). 浦「なんかこれ, ヤバイ」. 乙「ぶるぶるぶるぶるでしょ」. [浦島太郎が試しに一口食べてみると, 身体がぶるぶる震えだし, 乙姫ダンサーズが歌って舞う姿を幻視する] (◎ [能力] ◎ [遂行] 主体は未知の体験をする勇気があり, 実行する. ◎移行的発話: 主体に対して新作メニューの効果が現れる). 金「浦ちゃんに何した!」 (■桃太郎と金太郎が主体の変容を心配し, 金太郎は乙姫に詰め寄る). N「今auショップで龍宮城ぶるぶる貰えます」 (▲ [応報] 主体の体験する「ぶるぶる」の具体的内容は明かされない (op.F: ellipsis)).

#### 第19話 月との交信篇 (2015/8/31~)

三太郎とかぐや姫が縁側でお月見をしている (◎描写的発話: 金「かぐちゃんさ, 月の家族は元気なの?」. ▲ [操作] 不明). か「え~とね, 元気だよ」. 浦「こっから見えんの?」. か「見えないの?」. [かぐや姫は月の様子がいろいろ見えるらしい] 桃「見えるんだね」 (◎叙法的発話: 桃太郎はかぐや姫の能力に感心する). か「・・・なわけあるかい」 (▲ [能力] ▲ [遂行] ▲ 移行的発話: 夫婦関係が変化したかは不明. ■三太郎が同時にのけ反る). N「いろいろ見えます. ビデオパス」 (▲ [応報] 主体は妻にかつがれる. 「見える」という語が6回発話される (op.A: repetition)).

#### 第20話 もう一つの鬼退治篇 (2015/9/10~)

金太郎が山道を一人で歩いている (◎描写的発話: 熊「本当に行くの?」. ▲ [操作] 不明). 熊「二人に言わなくていいの?」. 金「うん. 桃ちゃんには今は守んなきゃいけない人がいるから」. 熊「浦ちゃんは?」. 金「ふつうの漁師だし, ああ見えて喧嘩嫌いだから」. 熊「でも, 友だちでしょ?」. 金「大事な友だちだから」 (▲ [能力] 主体の不安げな表情から, 独りで冒険ができるかは未知数. ▲ [遂行] 鬼退治は予告されるが, 内容は不明. ◎叙法的発話: 主体は友だちに負担をかけたくない). [主体は道の途中で, 桃太郎と浦島太郎を見つける] 桃「友だちだろ?」. 浦「だろ?」 (▲ 移行的発話: 鬼退治は予告されるが, 内容は不明. ■桃太郎と浦島太郎が主体に協力を申し出る). 金「僕には, 自由な友がいる」 (▲ [応報] 新冒険は告知さ

れるが、内容は明かされない (op.F: ellipsis)。

#### 第21話 鬼, 登場篇 (2015/9/16~)

三太郎が鬼と出会う (◎描写的発話: 金「あっ, あいつだ!」。▲[操作] 不明)。〔金太郎が興奮した様子で金棒をふりまわすが〕鬼「喧嘩の後は, もう友だちっすよね」(◎叙法的発話: 主体は三太郎と友だちになりたい)。浦「超軽いね」。桃「超軽いのよ」(◎移行的発話: 主体は三太郎と友だちになる。◎[能力] 主体には敵対者と和解する能力(ノリの軽さ)がある。◎[遂行] 主体は敵対者と和解する。■浦島太郎と桃太郎が日配せして論評しあう)。鬼「鬼退治, 終了!」。N「超, 超お手軽. スーパーカケホ登場」(◎[応報] 主体は新たな友だちを得る。先の「超軽い」(2回発話される)のシニフィエは「鬼の性格」, 最後の「超お手軽」のシニフィエは「新サービスの特長」(op.E: antanaclasis異義反復))。

#### 第22話 愛の結晶篇 (2015/9/24~)

桃太郎がかぐや姫から打ち明けられる (◎描写的発話: か「桃ちゃん, あのね, できちゃった」。▲[操作] 不明)。桃「えっ?」。か「私たちの愛の結晶」。浦「できちゃったの?」。金「おめでとう! あの竹光ってる」(■金太郎と浦島太郎が同時に懐妊を祝福する)。か「パッカーン」(◎叙法的発話: 主体は妻の告白と竹の変化に驚愕する)。桃「あっ, こっちのアイね」。N「きつとあなたも好きになるよ. 新しいiPhone誕生」(▲[能力] ▲[遂行]「愛の結晶」は主体の子供ではなかった。▲移行的発話: 子供が誕生するか否かは不明。▲[応報] 主体が報酬(愛の結晶)を得るか否かは不明。先の「愛」のシニフィエは「子供」, 後の「アイ」のシニフィエは「新型iPhone」(op.E: antanaclasis異義反復))。

#### 第23話 鬼と鬼嫁篇 (2015/10/22~)

鬼が桃太郎とかぐや姫の家遊びにくる (◎描写的発話: 桃「こちら鬼のオニちゃん」。か「いつもお世話になってます」。▲[操作] 不明)。鬼「うち, 5人目生まれたんすよ」。金「結婚してんだ」。浦「どんな奥さん?」。鬼「ああ, 鬼嫁です」(◎叙法的発話: 主体は自分と妻の力関係を聞いてもらいたい)。桃「ああ一緒・・・」。か「オイ!!!」(■三太郎は怖い嫁に縮こまる)。金「てか, 育児とかしてんの?」。鬼「自分, イクメンっすよ」(◎[能力] ◎[遂行] 主体には育児能力があり, それを実行している。◎移行的発話: 主体の家族重視の姿勢が判明する)。N「家族とともに, 家族一人一人のスマホ割引. auスマートバリュー」(◎[応報] 主体は子沢山。先の「鬼嫁」のシニフィエは「鬼の妻」, 後の「鬼嫁」のシニフィエは「怖い妻」(op.E: antanaclasis異義反復))。

#### 第24話 お供の秘密篇 (2015/11/1~)

桃太郎のお供を浦島太郎と金太郎が観察している (◎描写的発話: 浦「あれ? 桃ちゃんの犬って変わった?」。▲[操作] 不明)。桃「いつもの犬は, 花咲爺さんのとこ」。金「てか, 犬, 二匹いるの?」。桃「そう, ダブルスタンバイ」(◎叙法的発話: 主体はお供を他の物語に貸し出したい)。か「安心よね」。浦「じゃあ猿もダブルなの?」。桃「たまに猿蟹合戦あるから」(◎[能力] お供をダブルで養うことができる。◎[遂行] お供を他の物語に派遣している。◎移行的発話: 主体はお供の提供を通じて他の物語に介入する。■浦島太郎と金太郎が同時に驚愕する)。

桃「だからダブル, ダブル」. N「ダブルで速い. au」(◎[応報]主体が物語世界を拡大させる. 先の「ダブル」(5回発話される)は「お供が二匹ずついる」というシニフィエ, 最後の「ダブル」は「高速通信サービス」というシニフィエ (op.E: antanaclasis異義反復)).

#### 第25話 鬼の子篇 (2015/11/12~)

金太郎の家で三太郎と鬼が話をする (◎描写的発話: 金「鬼ちゃんて, すげーよな」. 浦「子供5人だもんな」. ▲[操作]不明). 桃「名前は?」. 鬼「まず赤鬼・青鬼・鬼子・オニオン・おにぎりっす」(◎叙法的発話: 主体は子供の名前を披露したい). 金「キラキラネームだ!」. 鬼「フィーリングっすよね」(◎[能力] ◎[遂行] 主体は独特のネーミングセンスを発揮できる). 浦「やっぱ軽いわ」. 桃「超軽い」(■浦島太郎と桃太郎が目配せして論評しあう). 金「ねえねえ, 次生まれたら名前どうすんの?」. 鬼「おいなり」(◎移行的発話: 主体は次に生まれる子の名前を明かす). N「超, 超お手軽. スーパーカケホ」(◎[応報] 主体の子供は「超軽い」名前を得る. 先の「軽い」(3回発話される)のシニフィエは「鬼の性格」, 最後の「お手軽」のシニフィエは「新サービスの特長」(op.E: antanaclasis異義反復)).

#### 第26話 いつもと違う龍宮城篇 (2015/12/6~)

乙姫が龍宮城で浦島太郎と金太郎を迎える (◎描写的発話: 浦「乙ちゃん」. 乙姫「いらっしゃいませ, どうぞ」. ▲[操作]不明). 金「なんか, いつもと違うね」. 乙「龍宮城でお買い物もできるのお」. 浦「何これ?」. 乙姫「あの有名なガラスの靴よお. 金ちゃんにはこれかな〔と長袖の上着を提示する〕」. 金「買いま〜す」(◎叙法的発話: 主体は龍宮城でショッピングしてもらいたい. ◎[能力] ◎[遂行] 主体は商売上手. (◎移行的発話: 主体は2人に商品を買った. ■金太郎と浦島太郎は同時に主体の歓心を買おうとする). 乙姫「お客様, すぐお似合いですう」. 金「あったかい」. N「auショップでお買い物. au WALLET Market」(▲[応報] 主体は大儲け. au WALLET Marketの具体的内容は明かされない (op.F: ellipsis)).

#### 第27話 鬼ちゃん露店篇 (2015/12/31~)

神社の参道で鬼が露店を出している (◎描写的発話: 桃「鬼ちゃん, 何してんの?」. ▲[操作]不明). か「あっ, おしるこ!」. 鬼「鬼甘・鬼硬・鬼濃い目. どういたしましょう」. 浦「なんか分からないけど, 鬼甘で」. 鬼「は〜い. 鬼甘, 増し増し入りました」. か「じゃ, わたしも」. 鬼「可愛い子ちゃんはタダだよ」(◎叙法的発話: 主体はかぐや姫にかなりサービスしたい. ◎[能力] ◎[遂行] 主体は露店を経営できる) 浦「女にも甘いな」. 桃「鬼甘だね」(◎移行的発話: 主体がladies' manであることが判明する. ■浦島太郎と桃太郎が目配せして論評しあう). N「今ならauショップで『鬼甘いしるこ』もらえます」(◎[応報] 主体は「鬼甘いしるこ」を無料サービスする代わりに淑女の好意を得る. 先の「甘い」(5回発話される)のシニフィエは「sugary」, 後の「甘い」(2回発話される)のシニフィエは「gentle」(op.E: antanaclasis異義反復)).

#### 第28話 みんながみんな英雄篇 (2015/12/31~)

桃太郎・金太郎・浦島太郎が山道を登っていく (◎描写的発話: ビジュアルが人物とその状況の特徴づける. ▲[操作]不明). 三太郎が初日の出に向かって思いをはせる (◎叙法的発話: 来年も良い年でありますように. ■来年も三太郎は一緒). [三太郎の多様な日常シーンが列挙

される。同時に多彩な昔話（おむすびコロリン・鶴の恩返し・花咲爺・金の斧銀の斧・笠地蔵）を想起させるビジュアルが次々と登場する〕（◎ [能力] ◎ [遂行] ◎ 移行的発話：今後のCM展開がビジュアルを通して予告される。◎ [応報] さらなる冒険自体が主体の絆を深める。冒険の具体的内容は一部分しか明かされない（op.G: a circumlocution 迂回表現））。



#### 4. 分析をめぐる考察

分析の結果まず明らかになったのは、全てのエピソードが[三太郎の物語+商品メッセージ(=ナレーション)]という組み立てであること。これはテレビCMの典型的なパターンでもあり、三太郎CMの場合、登場人物の「人間的ドラマ」はいずれも、auの商品/サービスの譬え話(allegory)になっている。そこでCMがどのようなレトリックで、メッセージをオーディエンスに届けようとしているのか(つまりオペレーションの種類(注2を参照))にまず着目してみたい。すると驚いたことに、全28話のエピソードは主に2種類のオペレーションに分けることができる。一つは同じ語句の足し算(op.A or E: repetition or antanaclasis (以下、タイプI))。もう一つはティーザー広告、すなわちメッセージ内容の引き算(op.F or G: ellipsis or circumlocution (以下、タイプII))である。

##### 4.1 タイプI：同じ語句の反復

同じ語句(「セット」「バックカーン」「家族一人一人」「ダブル」「軽い」「鬼嫁」等)を足し算するものは第2, 3, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 17, 19, 21, 22, 23, 24, 25, 27話である。そのうち第21, 23, 25, 27話の主体(すなわち主人公。上述の構造分析では斜体で表示した)は鬼。残りの12話は全て桃太郎と考えられる。

##### 4.1.1 主体が桃太郎のとき

桃太郎を主体に据えたエピソード群は、叙法的発話(分析概念Aの2: 主体がどんな心的態度を表明しているか)の差異によってさらに2つに分けることができる。すなわち主体が能動的に何かをしたい場合(第2, 6, 7, 8, 24話)と、主体が受動的に何かに驚愕したり、自分の過去を自慢する場合(第3, 9, 10, 12, 17, 19, 22話)である。

##### 4.1.1.1 桃太郎が能動的な場合

分析概念AおよびBで挙げたほぼ全ての項目(描写的発話・叙法的発話・移行的発話、能力・遂行・応報)が確認できる。ある状況に置かれた桃太郎は、何らかの希望を抱き、独自の能力を遂行して状況を変化させる(例: お供の雉が子沢山→雉の家族一人一人にきびだんごをあげる→金太郎が熊の提供を断念する)。しかし全てのエピソードを通して確認できなかった項目が

ある。それは〔操作〕つまり〔送り手〕の機能である。第2章第2節で述べたように、語りの連鎖にとって不可欠の要素は、行為の価値を決定する〔送り手〕の設定である。行為の連鎖は、外側の枠組みを成す超越的な決定者の要請によってはじめて生じる。さらに主体の行為は、一段高次の外部的なレベルに存在する受益者に受け取られることによって、はじめて物語的に終結する。

桃太郎に対して雉の家族に関する情報を与え、一人一人に対応したいと思わせたのは誰か。浦島太郎に「すごいの」が入っている玉手箱を与えたのは誰か。そして何よりも、金太郎が桃太郎や浦島太郎と出会うように仕向け、新しい冒険に誘ったのはそもそも何者か。これらの要請を行なえるのは、物語の枠組みの外側にいる超越的な決定者、すなわち広告の送り手 (= 広告主) 以外にはありえない。そう考えると、全てのエピソードの最後に登場するナレーションは、最終的な受益者、すなわちオーディエンスの手にするベネフィットだということが自ずと分かってくる。

このことを理解するには「弓矢と的」の隠喩が有効かもしれない。行為の連鎖は弓が引かれ、的に狙いが定められる状態から始まる。物語はまず、矢が放たれたか否かを巡って2つに分かれる (矢がいつまでも放たれないという物語も可能)。仮に矢が放たれた場合、的に命中するか否かを巡って物語はまた2つに分かれる。ところがおとぎ話の場合、弦を離れた矢が的に命中することは自明である (教訓的説話 = 目的論的言説)。起こる出来事は何もかも予め計画され、目論まれ、意味を与えられているのだ。だからこそ読者は一連の出来事を安心して体験できる。したがって物語とは、的を追い求める矢ではなく、矢を誘発した的なのである (スコールズ 1992 pp. 144-9)。この的を設定した者が送り手であり、的を射抜いた者への報酬は、そのまま広告の受け手が手にすることになる。

#### 4.1.1.2 桃太郎が受動的な場合

叙法的発話において、桃太郎が受動的に何かに驚愕するのは第12、17、19、22話。一方、自分の過去を自慢するのが第3、9、10話である。これらのエピソードでは全て、分析概念AおよびBで挙げた項目のうち移行的発話、能力・遂行・応報が確認できなかった。その理由として「主体が常に受け身である」という共通点が挙げられる。物語の外側にいて行為の価値を決定する〔送り手〕は、出来事を引き起こす者であり、登場人物は出来事の影響を受ける者である。多くの物語において主人公(主体)は、最初は必ず受動的なポジションをとる。主体は情報を貰ったり、満足や不満を感じたり、希望や恐怖の念を抱くよう仕向けられる (スコールズ1992 p.159)。ここでも同じように、桃太郎はある情報に驚愕したり、過去の出来事を自慢げに振り返ったりはするが、その後何らかの行動を起こして状況を変えることはしない。とすると、これらの逸話は物語として成立しないのだろうか。

桃太郎が人生を振り返って自慢する逸話群 (第3、9、10話) は、主体が発話の時点より前の事柄を述べている (後説法) ので、状況は既に移行していたとも解釈できるが、その他のエピソードは後説法を使っていない。だが改めて第12、17、19、22話を振り返ってみると奇妙なことに気づく。桃太郎に情報を与えて驚愕させるのは必ず、かぐや姫なのである。ちなみに彼女の視点から分析し直してみると、かぐや姫は真実と虚偽を巧みに織り交ぜて (「あのね、できちゃった」等)、夫婦関係の主導権を握りながら (「ジロりんちょ」等)、状況を変えていく (「はい、家族!」等)。行為の連鎖は起こっていたのである。では何故、私たちは桃太郎を主体にし

たのか、それはビジュアル・シークエンス（カット割り・パン・ズーム等）では、常に彼が状況の中心にいたからなのだ。

#### 4.1.2 主体が鬼のとき

第21, 23, 25, 27話の主体は鬼と考えられる。彼は三太郎の冒険が始まって8ヵ月後、2015年9月に突然現れる。鬼をフィーチャーしたエピソード群では、分析概念AおよびBで挙げたほぼ全ての項目（描写的発話・叙法的発話・移行的発話、能力・遂行・応報）が確認できる。ある状況に置かれた鬼は、何らかの希望を抱き、独自の能力を遂行して状況を変化させる（例：5人目の子供が生まれる→鬼嫁に頭が上がらない→育メン宣言をする）。例によって〔操作：送り手〕の階層は隠蔽される。留意しておきたいのは、鬼が登場するのが常に彼の自宅以外の場所であること。これは彼の話を受信する他者が必ず存在することを意味し、聞き手のうちの何人かは実際、鬼の言動について論評（新参者に対する品定め）を加えている。

また、商品メッセージを届けるレトリックに関して、鬼を巡るエピソード群は異義反復（antanaclasis）という技法を常用している。例えば「軽い」というシニフィアンがしばしば繰り返されるが、そのシニフィエは「鬼の性格」の時もあれば、「新サービスの特長」をさす時もある。

## 4.2 タイプⅡ：メッセージ内容の省略

商品／サービスの具体的内容を引き算するもの（ティーザー広告）は第1, 4, 5, 11, 13, 14, 15, 16, 18, 20, 26, 28話。そのうち第4, 11, 15, 16, 18話の主体（主人公）は浦島太郎。第13, 14, 26話の主体は乙姫。第1, 5, 20話の主体は金太郎。そして第28話は三太郎が主体と考えられる。

### 4.2.1 主体が浦島太郎のとき

浦島太郎を前面に出したエピソード群では、分析概念AおよびBで挙げた描写的発話・叙法的発話・移行的発話、能力・遂行が確認できる。ある状況に置かれた浦島太郎は、何らかの希望を抱き、独自の能力を遂行して状況を変化させる（例：浦島太郎は桃太郎の希望を耳にする→浦島太郎の掌には亀がいる→浦島太郎は友だちを龍宮城へ連れて行く）。例によって〔操作：送り手〕の階層は隠蔽される。

注目すべきは〔応報〕がいずれの逸話でも確認できないことである。この機能は主体が独自の能力を遂行した後、何らかの報酬を得るというものだが、玉手箱から出てきた「すごい」の正体は解らず、乙姫に想いが届いたのかも判らず、「ぶるぶる」の具体的内容も分からない。もちろんこれらは、CMの意味作用がティーザー広告であることと関係している。この手法は商品／サービスの具体的内容を意図的に省略し、オーディエンスの渴望感を煽るという目論見をもつ。ただ見方を変えてみると、浦島太郎は〔応報〕をある意味体験している。玉手箱を開けたせいでちょっと白髪になったり、一番速く走れるのにルール違反で失格になったり、ガラスの靴のサイズが合わなくて乙姫に睨まれたり・・・彼はネガティブな報いを受けている。しかしポジティブな報いを得たかは、定かではない。

#### 4.2.2 主体が乙姫のとき

第13, 14, 26話の主体は乙姫と考えられる。そのエピソード群では、分析概念AおよびBで挙げた描写的発話・叙法的発話・移行的発話、能力・遂行が確認できる。ある状況に置かれた乙姫は、何らかの目論見を抱き、独自の能力を遂行して状況を変化させる(例:乙姫はクラブ龍宮城のママである→乙姫は男性客(特に浦島太郎)をコントロールできる→龍宮城は商売繁盛)。例によって「操作:送り手」の階層は隠蔽される。加えて「応報」の具体的内容は意図的に省略される(ティーザー広告)。

このパターンは浦島太郎が主体のときと構造的に同一である。浦島と乙姫のエピソード群は、裏表の関係にある。浦島の言動はほぼ乙姫を動機としており、乙姫の言動はほぼ浦島に向けられる。お互いがお互いを常に必要としているのである。

#### 4.2.3 主体が金太郎のとき

金太郎を前面に出したエピソード群(第1, 5, 20話)では、分析概念AおよびBで挙げた描写的発話・叙法的発話のみ確認できる。移行的発話および能力・遂行は同定できない。例によって「操作:送り手」の階層は隠蔽される。第5話は全28話中最も珍妙なエピソードと言える。野原で戯れる3人の関係そのものが、商品のシンクロ機能をビジュアル化しており、逸話自体が商品に意味を付与している。

第1話と第20話は形式的にも、内容的にも大変よく似ている。いずれも「金太郎が現状に不満を抱く(新しい冒険をしたい)→桃太郎と浦島太郎が助力を申し出る」という構造をもつ。主体の能力と遂行力は極めて不安定で、何らかの助けがないと状況は変化しにくい。また新たな冒険は告知されるが、具体的内容は意図的に省略される(ティーザー広告)。

#### 4.2.4 主体が三太郎のとき

第28話は2015年最後のエピソードで大晦日に放送された。分析概念AおよびBで挙げたほぼ全ての項目(描写的発話・叙法的発話・移行的発話、能力・遂行・応報)が確認できる。例によって「操作:送り手」の階層は隠蔽される。この逸話の特徴は台詞が全くないこと。全てがビジュアルのモンタージュで構成されていることである。3人の心的態度(新年への期待?)は、山頂で朝日を見つめる彼らの仕草に集約される。注目すべきは新たな物語(5種類の昔話)が、次々と挿入されていること。今後の展開を映画の予告編のように、チラリと見せてオーディエンスの渴望感を煽っている。

### 5. おわりに:「何となく好き」あるいはホモソーシャルな欲望

言うまでもないが三太郎CMはおとぎ話をベースにしている。3つの昔話は日本人の多くが共有できる物語であり、CMが幅広い世代の好感を得ている理由の一端もそこにあると推測できる。本論文が物語内容の構造分析を試みた動機もまたそこにあった。CMテキストを綿密に観察した結果、28のエピソードのうち22本に、おとぎ話に典型的な「語りの連鎖」を確認することができた。例外は、桃太郎が自らの出生の経緯と結婚の馴れ初めを、後になって語る逸話3本と、金太郎を中心に据えた3つのエピソードであった。

さらに重要な知見は、主役と見做すことのできる人物が、エピソード毎に目まぐるしく交替

することであった。様々な人物の視点から物語が構成されるので、オーディエンスは物語内の人間関係を、より多面的に捉えるよう導かれる。そうした人間関係を暗示する指標（構造分析で■を記した徴候）のうち、反復されるものを列挙してみよう。

- 指標1：男たちはアイドル的な女性を囲んで団欒する（第9, 12, 17, 19, 22話）。
- 指標2：男たちは魔性の女に誑かされる（第13, 14, 16, 18, 26話）。
- 指標3：男たちは怖い嫁の言動に敏感である（第7, 9, 17, 23話）。
- 指標4：金太郎の家に集まるのは男たちだけである（第1, 3, 8, 25話）。
- 指標5：男たちの活動に女性は参加しない（第5, 11, 14, 15, 20, 21話）。
- 指標6：男たちは目配せを交わし同じ仕草をする（第4, 5, 7, 17, 21, 25, 27話）。

文化研究家のイヴ・セジウィックは、恋愛／性愛的な意味をもたない同性間の結びつきを“homosocial”と名付けた（セジウィック2001）。男同士の間に強い絆があればあるほど、それが性的関係と見做されないよう、彼らは激しく同性愛を嫌悪する（homophobia）。ホモソーシャルな男たちは、異性愛こそがあるべき愛の姿であって、男は女を保護者のように慈しみ、守る必要があると強調する。しかしそれは女性嫌悪（misogyny）とホモフォビアの裏返しに他ならない。このホモソーシャルな欲望こそが、近代的な恋愛（the modern love）を構造的に支えているとセジウィックは、英国小説の精読を通じて具体的に論証する。

確かに〔指標1〕〔指標2〕は、男たちが異性愛志向に「主体的に服従」する姿を示しており、乙姫に誑かされて幻覚状態に陥った浦島太郎を見た金太郎が、「浦ちゃんに何した！」と彼女に詰め寄る場面は、隠蔽されたミソジニーが凶ならずも露呈した瞬間と言える。この隠れた心的傾向はまた、〔指標3〕によって繰り返し補完される。そして〔指標4〕〔指標5〕〔指標6〕で示される様々な男同士の関係は、しばしば体育会系部活動に見られる異性愛者の友情そのものである。三太郎CMシリーズが幅広い世代に「何となく好き」と好感されるのは、ホモソーシャルな欲望に、私たち（男性の）オーディエンスが凶ならずも共鳴したからなのかもしれない。

## 参 考 文 献

- グレマス, アルジルダス・ジュリアン (1988 (原書1966)) 田島宏他訳『構造意味論—方法の探究—』, 紀伊国屋書店。
- CM総合研究所編 (2015, 2016) 『月刊CM index』通巻347~377号, 東京企画。
- 週刊現代編 (2011) 『週刊現代』2011年5月7・11日合併号, 講談社。
- ジュネット, ジェラルド (1985 (原書1972),) 花輪光他訳『物語のディスクルー方法論の試み—』, 水声社。
- スコルズ, ロバート (1992 (原書1974)) 高井宏子他訳『スコルズの文学講義—テキストの構造分析にむけて—』, 岩波書店。
- セジウィック, イヴ・ゴゾフスキー (2001 (原書1985)) 上原早苗訳『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』, 名古屋大学出版会。
- 妹尾俊之 (2015) 「広告への物語論的アプローチ」『広告コミュニケーション研究ハンドブック』, 有斐閣ブックス。
- 宣伝会議編 (2016) 『月刊宣伝会議』通巻897号, 宣伝会議。
- 土田知則, 神郡悦子, 伊藤直哉 (初版1996, 1997) 『ワードマップ現代文学理論—テキスト・読み・世界—』, 新曜社。
- 中野弘美 (2012) 「広告の記号論」『横浜経営研究』第33巻第3号。
- 中野弘美 (2015) 「不在と省略のレトリック—広告の記号論2—」『横浜経営研究』第35巻第4号。

- 中野弘美 (2016) 「反復と代用—広告の記号論3—」『横浜経営研究』第37巻第1号.  
バリー, ピーター (2014 (原書2009)) 高橋和久監訳『文学理論講義』, ミネルヴァ書房.  
バルト, ロラン (1973 (原書1970)) 沢崎浩平訳『S/Z—バルザック「サラジヌ」の構造分析—』, みすず書房.  
バルト, ロラン (1988 (原書1985)) 花輪光訳『記号学の冒険』, みすず書房.  
プロップ, ウラジミール (1987 (原書1928)) 北岡誠司他訳『昔話の形態学』, 水声社.  
山本高史 (2016) 「広告を読む。」『月刊宣伝会議』7月号, 通巻897号.

図版: 『月刊宣伝会議』2016年7月号p. 104より重引.

[なかの ひろみ 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授]

[2017年10月6日受理]